

文化イベントに参加した学生の学び
「正統的周辺参加」理論の視点からの一考察

Students Learning Experience through Cultural Events
from the Viewpoint of Legitimate Peripheral Participation

齊藤 仁志

Hitoshi Saito

長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要

10巻1号

Bulletin of Faculty of Contemporary Social Studies

Nagasaki Wesleyan University

2012年3月

文化イベントに参加した学生の学び 「正統的周辺参加」理論の視点からの一考察*

齊藤 仁志**

Students Learning Experience through Cultural Events
from the Viewpoint of Legitimate Peripheral Participation†

Hitoshi Saito**

<キーワード>

文化イベント 実践共同体 状況的学習 帰属意識

<要旨>

長崎ウエスレヤン大学外国語学科では学科主催の数々の文化イベントを実施してきた。こうした文化イベントに参加する中で、学生はどのような成長を遂げてきたのか。何を学んだのかをレイブとウェンガーの主張する正統的周辺参加という枠組みで考察した。結果、イベントに参加・参画した学生は皆、充実感を得てイベントを肯定的に評価しているが、イベントへのかかわり方、役割には差があり、年々参加を重ねることで中核的な役割を担うようになる傾向がみられた。また学年や国籍を超えて協力しイベントを成功に導く中で、交流できることを楽しみ、連帯感、大学への帰属意識が育ち、自主性が高まることがみえた。

はじめに・目的

長崎ウエスレヤン大学外国語学科では年間を通し、留学生と日本人学生とが協力し、理解を深め、親密になり、大学生活を充実させるための様々な文化イベントが行われている。下記に2011年度に行われた主な行事を列挙する。

- 4月16日(土) 新入生交流会
- 5月21日(土) メイフェスタ
- 6月23日(木) タイ フィリピン デー
- 7月7日(木) 七夕祭り
- 7月21日(木) 留学生の祭典
- 8月25日(木) 中国 台湾デー
- 10月20日(木) 韓国デー
- 11月10日(木) ハロウィン パーティー
- 11月24日(木) カナダ イギリス ブラジル フィジー デー
- 12月15日(木) インターナショナル トークショー
- 1月19日(木) 日本語/英語スピーチコンテスト

上記は外国語学科が主催した文化イベントに関して挙げたもので、これ以外にも鎮西学園主催の「平和大行進」、「諫早市民クリスマスコンサート」、学生会主催の文化祭である「2ドル祭」や大学主催の「クリスマス点灯式」などが実施された。

また筆者が担当するコミュニティーサービス¹では外国語学科だけでなく他学科の学生も参加し日本人学生と留学生の交流の場として「日本語談話室」を年間100回程度実施している。さらに留学生、日本人学生、地域住民との交流を目的とした「交流さんぽ会」は年間20回程度行われ、諫早周辺の散策、地域清掃、

* Received February 3, 2012

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

交流スポーツ会、豚汁会などを行っている。こうした活動に学生が参加する目的は「交流を通し相互理解を深め充実した大学生活をおくるため」、端的に学生の声を借りれば「楽しむため」のようだが、こうした活動に学生が参集、参与、参画することを通して学生が得られる学びがあり、経験を重ねるに従い成長していることが伺える。本稿では先に挙げた外国語学科主催の文化イベントの概略を紹介し、学生が参加を通してどのように成長したかをジーン・レイブとエティエンヌ・ウェンガーの主張する正統的周縁的参加理論（Legitimate Peripheral Participation：LPP）の視点から考察する。

1. 参加の文化イベント紹介

およそ月に一度の頻度で行われている文化イベントは外国語学科の全学年を対象として行われ、各学年に応じた役割があり、学生一人一人がその役割に応じて主体的に参加することが求められる。林（2000）によると参加には集団内での役割（主体性、情報量、権限、責任等）の違いにより、「参画」、「参与」、「参集」という3つの段階に分けることができる。

「参集（Attendance）」の段階は集団学習での発展と進化の中で最も初歩的なステージにあたり、その場に「いあわず」受動的な参加段階を呼ぶ。情報は支援者側から参集者側へ一方向的に流れ、知識量および理解は断片的なものとなる。

「参与（Corroboration）」の段階はグループの学びに「かかわる」段階と言える。参加者同士と双方向のインタラクティブな行動をとり、「部分的」限定的だが、「能動的」にその場の「小状況」にかかわることになる。

「参画（Commitment）」の段階は学びの場を組織的に「にないあう」ステージにあたる。この段階で参加者は、自らが参加する学びの“場”自体の設営・運営（経営）を自ら担うことになる。そのために参加者の行動は、自己責任が高まり、主催者に依存するのではなく「自省的」かつ「組織的」になる。その結果、構造的な理解が深まり、その場を支えている「全体的状況」を把握したものとなる。

ここでは外国語学科の文化イベントを参加の3つの段階、参集、参与、参画によって4つに分類し、それぞれのイベントの概略を述べる。

1-1. 教員が参画し、4～2年生が参与し、1年生が参集するイベント

新入生交流会は新入生が大学にできるだけ早く順応できることを目的に学科に所属する教員および全学年を対象に4月16日(土)大学キャンパス内で行われた。交流会は学科教員が大まかな活動の流れを計画し、2～4年生が舞台設営や飾りつけなどの会場を設営し、各種催しの説明と運営を行った。新入生としても在校生としてもこの交流会は年度初めに行うイベントであり、このイベントを成功させることで本学でのキャンパスライフに肯定的に捉えられるキーとなるイベントと考えている。

	参 画	参 与	参 集
4月16日(土) 新入生交流会	教 員	4～2年生	1年生
	← 中心的 (十全参加)		→ 周縁的

図1-1 新入生交流会への参加の段階

1-2. 教員が参画し、4～2年生が中心的に、1年生が周縁的に参与するイベント

5月には学科主催の行事として最も大きく、外国語学科を象徴するイベント「メイフェスタⁱⁱ」が行われる。メイフェスタは「見て食べて学ぼう！世界の文化を体感する1日」というコピーと共に2004年から開催され、2011年度で8回目を数える。学科生がほぼ全員参加し、地域住民や卒業生も数多く来校する。メイフェスタでは海外コミュニティーサービスや、海外スタディーツアーなどで体験したことを写真パネルとして掲示し、これらの体験学習に参加した学生がそこで得た学び来場者に説明し、隣国の社会問題や生活事情などを伝える場が提供されている。またフードコートⁱⁱⁱも充実しており、タイ、フィリピン、中国、ブラジル、韓国などからの留学生が前日から郷土料理を仕込み、模擬店を出店している。またフェアトレードを行う大学サークルがアジアやアフリカの雑貨を販売し、地域住民の方がボディペイントや

ネールアート、足裏マッサージなどを受けられるコーナーも設置されている。さらに野外ステージが設置され、ステージでは学生による民族舞踊や伝統音楽の演奏、地域の音楽サークルによるジャズやレゲエ、アフリカの打楽器による演奏と舞踊などが会場を沸かせ、学生や参加した地域の方、小中学生などが一緒に踊る光景が毎年見られる。2011年度は他、世界各地の景品がもらえるビンゴや、学生によるダンスが行われ、4月に行われた新入生交流会で覚えたダンスを学部生全員がステージを囲み踊るなど多彩なステージパフォーマンスが行われる。

メイフェスタは外国語学科で最も規模の大きなイベントで、数名の教員が参画し、外国語学科の学生全員が学年を問わずステージの司会や、各国の料理の調理と販売、会場設営などを行う。しかし、こうしたイベントを運営するなかで上級生である2～4年生が下級生である1年生にノウハウを伝え指導的な役目を担いより主体的に参加している。この点から2～4年生はより中心的に参加し、1年生は周縁的な参加をしている。このような参加の段階は異なってもメイフェスタは、教員と学生とが共にチームとなり、会場設営や撤収、ステージの司会、料理、販売、集計などを行い、共に運営し作り上げるイベントと言える。

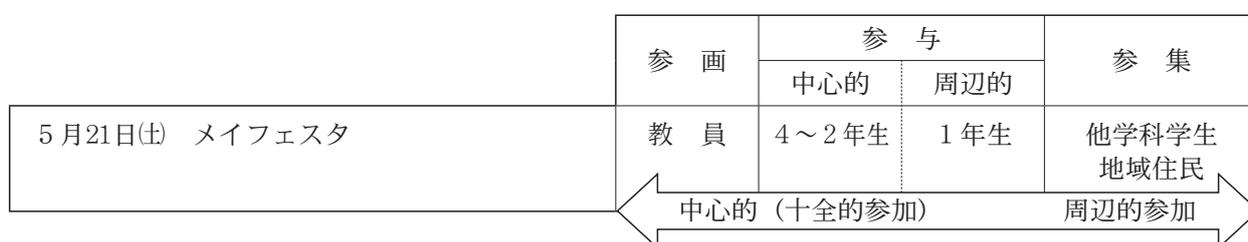


図1-2 メイフェスタへの参加の段階

1-3. 一部の学生が参画し、他の学生及び教員が参集するイベント

留学生が自国・自文化を紹介するイベント、International Day^{iv}は6月以降、ほぼ月に一度の頻度で行われている。月により企画運営する国が決められ、それぞれの国から来た学生がイベントの計画を立て、自文化を日本人学生や他国からの留学生に紹介する。6月はタイとフィリピン、8月は中国と台湾、10月は韓国、11月はカナダ、イギリス、ブラジル、フィジーからの留学生が歌や踊り、伝統楽器による演奏などを披露し、ゲームを紹介し、自国の料理をふるまい、パワーポイントで文化紹介をした。

また七夕が行われる7月、そしてハロウィンの11月にそれぞれ七夕祭り^vとハロウィンパーティー^{vi}が行われる。七夕祭りでは学生が司会進行を務め、ゲームや盆踊り、そうめん流しを行う。ハロウィンパーティーは仮想コンテストが行われ、シチューが振舞われる。企画から実行まで学生が中心に行い、飾り付けやステージの設営、撤収等も学生が協力して行っている。

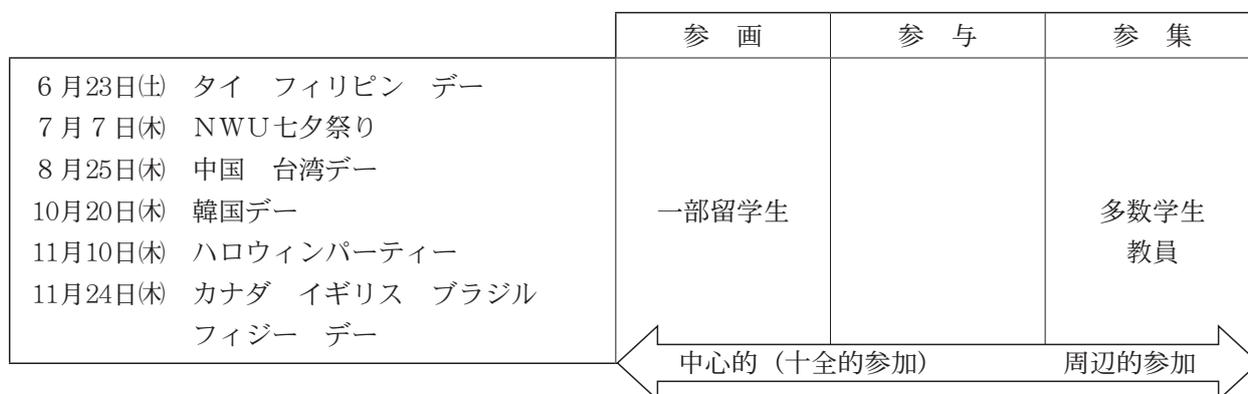


図1-3 インターナショナルデー等への参加の段階

1-4. 教員が参画し、特定の学生が参与、その他の学生が参集するイベント

1-4に該当するイベントは「留学生の祭典」「インターナショナル トークショー」「英語/日本語スピーチコンテスト」の3つが数えられる。この3つは何れも本学の西山ホールで行われ、歌や踊り、異文

化を話題とした会話、スピーチなどの披露型イベントという共通点がある。内容や形式こそ様々だが3つとも教員がイベントを計画、運営などの参画を行い、一部の学生が出場者や司会者として参与し、また多くの学生が聴衆者として参集する形式で行われている。

「留学生の祭典^Ⅲ」は7月に行われ、留学生が各国の歌や踊り、演劇などを披露する。毎年1年生に所属するほぼ全ての留学生がステージ上で各国の早口言葉や大声コンテスト、演劇、落語、パワーポイントを使った紙芝居で紹介する海外の昔話、伝統楽器の演奏などを披露している。そして日本人学生や地域住民が参集する。このイベントは教員が企画し、留学生スタッフが司会、記録係、照明係、音響係、受付係などに分かれ参与し、出場者も部分的、限定的ではあるが能動的に関わりを持っている。

「インターナショナル トークショー」は各国からの留学生がステージ上に置かれた椅子に座り、教員がステージ上で司会者として様々な質問を行う。質問の多くは、各国の文化や価値観を問う質問で、トークショーを聞きに来た聴衆は異文化の相違点を感じつつも、共通点も感じる場となっている。このイベントも教員が参画し、ステージ上で会話を行う留学生が参与し、聴衆として来場する他の学生や地域住民、高校生が参集をしている。

「英語／日本語スピーチコンテスト」は1月に行われ、文学作品などを朗読し、そのパフォーマンスを競う。朗読原稿の用意、出場者の合同練習日を調整するといった参画に教師が携わり、一部の学生が、出場者、司会者、会場の設営と撤収係、受け付け案内係、として参与する。そして他の多くの学生が会場でスピーチを聞く聴衆者として参集している。

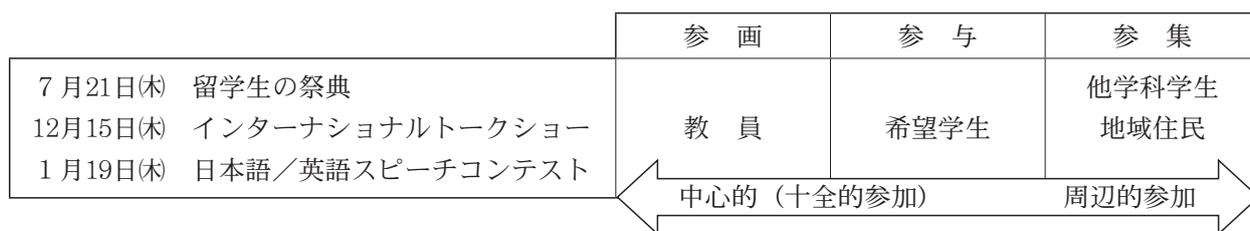


図1-4 留学生の祭典等への参加の段階

2. 正統的周辺参加理論

古典的学習では命題的知識を個人が脳に取り込み獲得する行為と定義してきた。つまり学習とは個人が構造を内化し操作し習熟する過程および事象と捉えられてきた。

こうした古典的な学習モデルに対し、人工知能学者のレイヴ、そして人類学者のウェンガーはその著書『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』の中で学習や思考、理解に対する解釈の再考を迫り、「知識が教師により伝達され、個体の中に蓄積するもの」といった捉え方に異議を唱えた。そして「学習とは状況に埋め込まれている」と捉え、何らかの実践を行う共同体に参加するなかで学習が起こり、その学習は参加者個人のみならず、実践共同体にも生起していると捉えた。こうした実践を通して学習するコミュニティを「実践共同体 (Community of Practice)」、このような実践共同体に参与することを通じて学ばれる知識と技能の習得実践のことを「状況的学習 (situated learning)」と呼んだ。また参加者が実践のための計画・実行など参画に携わることができる段階を「十全的参加 (Full Participation)」、与えられた部分的、限定的であるが小状況において課題が進行できる段階を「周辺の参加 (Peripheral Participation)」とした。具体的には文化イベントのような「実践共同体」に参加した新入生は初め周辺の作業にあたる。そのため「周辺の参加」という立場で実践共同体に属していると言える。そして2年生、3年生、4年生と実践(経験)を重ねるに従い「十全的参加」へと移行する。

このように周辺の参加が十全的参加へと移行するプロセスをレイヴとウェンガーは「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation, 以下LPP)」として理論化した。

3. メイフェスタ

外国語学科主催の文化イベントで規模が最も大きなイベント、メイフェスタは毎年5月に行われる。新学期が始まり一カ月半した時期に行われるこのイベントを成功させ学生が達成感を得ることは、その後に

行われる他の文化イベントに主体的に参加できるか、チームとして動くことができるかを方向づける大事なイベントとなる。そこでここではメイフェスタ後に行ったアンケートとインタビューを分析し、参加した学生がどのように感じ何を学んだのかを分析考察する。

3-1. 調査概要

メイフェスタに参加した学生のうち無作為に抽出した33人にアンケート用紙での質問の後、半構造化インタビューを行った。調査協力者の内訳は4年生10名、3年生8名、2年生8名、1年生7名だった。アンケート調査での質問項目は「参加回数が増えるごとに役割が増えているか」「参加回数が増えるごとに自主的に動くことができたか」「やり方、動き方など自分の知っているノウハウを他の人に伝えたか」「参加回数が増えるごとに、長崎ウエスレヤン大学あるいは外国語学科（旧、国際交流学科）の学生として帰属意識、連帯感が高まったか」「メイフェスタは留学生と日本人学生が交流する機会になっているか」といった質問項目を中心に調査を行った。この調査で得られたデータを正統的周辺参加理論の視点で分析した。

3-2. 結果

①前に踏み出す力（役割、主体性、積極性）とアイデンティティ（帰属意識、連帯感）

22名中18名（82%）の学生が「参加回数が増えるごとに役割が増えている」と答えた。同様に「参加回数が増えるごとに自主的に動くことができる」と感じた学生は20人/23人（87%）、そして23名中23名全員が「参加回数が増えるごとに、長崎ウエスレヤン大学あるいは外国語学科に帰属意識をもち、連帯感が高まった」と評価している。周辺の参加から十全的参加に移行し、それに伴い役割、自主性、帰属意識、連帯感が高まったといえる。

また、半構造化インタビューの中で満足感、達成感を得たコメントが非常に多かった。こうした満足感が大学生活への評価に結び付いている。

- ・この大学でよかったと思える大事なイベント。（1年生）
- ・メイフェスタはウエスレヤンで学生生活を送る上でとても良い思い出となります。必須条件です。（4年生）
- ・必ず誰もが笑顔になれる。ウエ大ってこんなにアクティブで面白いんだ！ってしてもらえ、イメージアップにつながっている。（2年生）
- ・とても有意義なイベント。素敵な思い出作りの場となっています。（3年生）
- ・学生が主体となるイベントなので準備なども大変だけどいい思い出を作ることができた。（4年生）

②チームで働く力、交流

「やり方、動き方など自分の知っているノウハウを他の人に伝えた」と感じた学生は17人/23人（74%）、「メイフェスタは留学生と日本人学生が交流する機会になっている」は29/30（97%）となった。半構造化インタビューの結果でもチームで働くことへの正の評価、交流への正の評価が目立った。結果、周辺の参加をする学生に対し、より十全的に参加する学生がもっている知識や技術を提供し、よりよい実践を参加者全員が心がける。そして実践共同体自身が成長し、参加者全体の満足感が高まり、実践共同体に一体感を感じるといった正の連鎖が伺える。

- ・準備や当日のみんなの顔を見るのが好きです。本当に心から楽しんでいる表情をしています。（4年生）
- ・仲間意識が高まって協力して何かをやり遂げる達成感も得られた。（4年生）
- ・メイフェスタは学科を家族のような存在にしてくれるイベント。（1年生）
- ・メイフェスタを通して、日本人学生、留学生そして先生たちと一つになれる。（2年生）
- ・絆を強めることができるし、チームワークが生まれます。（4年生）
- ・皆が協力し合いながら今年のメイフェスタも昨年と比べてもますます良いものになったと思います。（2年生）
- ・先輩たちから様々な意見を聞いたりして成長できたし、留学生との交流もできるので毎年楽しくイベントに取り組んでいます。（3年生）
- ・メイフェスタを通じて普段交流することのない学生と交流することが出来、学校の連帯感も高まると

思います。(4年生)

- ・メイフェスタを通じて、スタッフとして参加することで他学年の学生とも留学生とも仲良くなれています。メイフェスタは多くの人と交流するいい機会だと思います。(3年生)
- ・留学生と日本人学生が交流する機会があったので本当に楽しかった。(3年生)
- ・留学生の特技など、たくさん知ることができるし、地域の子どもたちとも触れ合う機会があってとてもよいと思う。(3年生)
- ・メイフェスタを通して例年違う学年同士での交流が盛ん。(4年生)
- ・メイフェスタは学生と学生、大学と地域、地域と地域が繋がる大きなきっかけとなるイベントです。(4年生)
- ・年度の初めにあるので、新入生との交流にもなっているいい機会だと思った。(4年生)
- ・自分が積極的になれたので、他学年の人と交流する機会になった。(4年生)
- ・外国の方たちや地域の方たちと交流できることは小さな子どもたちにもお年寄りにも素敵な体験になると思います。
- ・それぞれの国の人たちが自国を楽しく素敵に自慢、アピールできる。(4年生)
- ・いろんな国の料理があって様々な料理を知ることができますし、いろんな国の方と触れ合うことができるので良いことだと思います。(1年生)

③提案

半構造化インタビューでは僅かであったが、3-4年生学生からの建設的な批判、改善案を受けた。これらは学生が主体的に参与し、周辺の参加から十全的な参加へ移行が進んでいるためだと考えられる。

- ・大学のイベントで一番楽しい。もっと長い時間でできればうれしい。夜のメイフェスタなんか楽しそう。(4年生)
- ・チラシの配布や宣伝などはもっと積極的に長い期間やっていたら集客率も上がると思います。(4年生)
- ・これからの目標としては他学科の学生にももっと興味を持って参加してもらえるようなアイデアが出ればと思います。(3年生)
- ・もっと全員が参加できるようにしてほしい。役割もうちの学科だけでなく、たくさんの学生とみんなでやりたい。(3年生)

3-3. 考察

メイフェスタは外国語学科の数名の教員が参画し、外国語学科の日本人学生および留学生が参与し、他学科の学生や地域住民が参集している。しかし参与している学生の主体性や知識は同質ではなく、学年が上がり、参加回数が増えることにより十全的な参加へ移行する傾向が見られた。そしてメイフェスタという「実践共同体」への新参者である新入生は取り組み方を見ながら、あるいは直接的に指導を受けながら吸収している。そして実践を通じて学年や国籍の垣根を越えた絆、仲間意識が芽生え、参与した学生全てが大学または学科に帰属意識を感じるようになった。このような効果が毎年5月という学期が始まり、日が浅い時期に得られることは、学部授業など他の教育的場においても少なからぬ正の効果を与えていると考えられる。

4. 年度計画としての文化イベント まとめを代えて

新学期が始まり4月に新入生交流会が行われる。そこで翌月に行われるメイフェスタでスタッフとなる学生の募集を案内し、メイフェスタのフィナーレで参加者全員が踊るダンスの振り付けを練習する。5月にはメイフェスタが行われ、前章、3. で考察した通り参加した学生はイベントの成功のためノウハウを伝え、周辺の参加から十全的な参加へと移行がみられる。こうした実践共同体で中核的な存在に成長することは単に実践のための技術——ここでは文化イベントを成功させるための知識や技術——だけを学ぶわけではない。主体的に動く力、チームで動く力、コミュニケーション力が養われる。またメイフェスタの学生スタッフは部分的、限定的に小状況の運営を任せられ、企画、全体的な運営は教員が行ってきた。しかし、6月以降行われる多くのイベントは学生が中心的に企画し、運営する。

メイフェスタという実践共同体だけを見た際は、古参者である3-4年生が新参者である1-2年生にノウハウを伝え、同時に古参者自身がより中心的な存在へと進み、役割と責任を引き継いできた。しかし、6月以降のイベントでは教員が行ってきた十全的な参加者の役割をも学生が担うようになる。学ぶ存在(周辺の参加)から伝える存在(古参者)になり、同時に古参者となった学生もまた十全的な参加者へ向けて再び学ぶ存在になる。こうした学習の連鎖はまさに文化イベントが実践共同体であることを意味している。経済産業省は社会人として求められる能力として「前に踏み出す力」「チームで動く力」「考え抜く力」3つを挙げ、その3つの力を「社会人基礎力」と呼んでいる。また日本経済団体連合会が2011年9月に発表した調査結果によれば「コミュニケーション力」は8年間連続して企業が新卒採用者に最も求める能力とある。こうした社会のニーズに応えるためには、いかに主体性やチームワーク力、コミュニケーション力を育てるのか、評価していくのか、また戦略的に計画的に学内外の活動に取り入れていくのが重要だと言える。本学で行われている文化イベントはこうした役割の一端を担っている。しかし、教員が学生の主体性やチームワーク力、コミュニケーション力を育てる場であるという認識は教師間で共有されているとは言えない。こうした意識の共有、そしてこうした副次的な効果を目指し加え、年度計画を見直し改善をしていくことは今後の教育モデルともなりうる先駆的な活動だと考える。

謝辞：メイフェスタの企画運営をし、本稿の執筆に際し励まし続けてくださった長崎ウエスレヤン大学現代社会学部外国語学科長J. ロメロ教授、同学科南川助教、同学科片山講師に深謝の意を表す。

参考文献

- ・熊本大学大学院教授システム学研究科「正統的周辺参加と足場作り」
http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/opencourses/pf/3Block/09/09-1_text.html (2012/1/27確認)
- ・佐野彰(2006)「正統的周辺参加理論に基づくWikiコミュニティが学生の学習活動に与えた影響」『九州産業大学芸術学部研究報告』37、87-101 九州産業大学
- ・酒井一郎(2005)「ホリスティック感受性教育によるコミュニティビジネス実践論ー“ミニたまゆり”子どものまち」プロジェクト事例研究ー」人間福祉研究8. 田園調布大学
- ・ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー著/佐伯胖訳(1993)『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加』産業図書株式会社
- ・林義樹(2000)「「学びと支援」の原理的考察;『参画教育』のコンセプト構築の基礎作業ー社会教育における『参加型学習』への変化を手がかりにしてー」人文学会雑誌30周年記念論文集. 31. 3 武蔵大学人文学会
- ・ハンクス、ウィリアム F.(1993)「序文」ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー著佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加』Pp. 5-20、産業図書株式会社
- ・御館久里恵(2010)「留学生と児童が共に学ぶ異文化理解教育の実践ー小学校における留学生の「正統的周辺参加」ー」『鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要』5、33-43. 鳥取大学国際交流センター
- ・李麗麗(2011)「中国人大学院留学生のアカデミック・インターアクションに関する調査ー正統的周辺参加から十全的な参加への仮定の分析と考察」『桜美林言語教育論叢』7、17-31. 桜美林大学

註

- ⁱ コミュニティーサービス：本学の全学教育課程科目の一つ。社会貢献を通し現代社会の課題を体験し、学習の動機付けや自己啓発の機会を提供することを目的にする。
- ⁱⁱ メイフェスタ報告：
<http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1205> (2012/1/27確認)
- ⁱⁱⁱ 2011年度のメイフェスタで得た収益は東日本大地震義援金およびアジアの子どもたちの修学支援に充てられている。
- ^{iv} タイ・フィリピン デー報告

- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1225> (2012/1/27確認)
中国・台湾デー報告
- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1237> (2012/1/27確認)
韓国デー報告
- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1268> (2012/1/27確認)
カナダ・イギリス・ブラジル・フィジー デー報告
- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/> (2012/1/27確認)
v 七夕祭り報告
- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1227> (2012/1/27確認)
vi ハロウィンパーティーの報告
- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1108> (2012/1/27確認)
vii 留学生の祭典報告
- <http://www.wesleyan.ac.jp/edu/faculty/international/blog/item/1228> (2012/1/27確認)